

投稿論文

# オランダにおける中国系第二世代の 社会統合

——ライフヒストリーの分析から

山本 須美子 東洋大学教授

キーワード： 中国系第二世代，社会統合，ライフヒストリー

本論の目的は、社会統合の成功例といわれてきたオランダの中国系第二世代が、いかに社会経済的に上昇し、他方で親の背景にある文化や文化的アイデンティティをいかに保持しているのかを検討し、社会統合の特徴を明らかにすることである。方法としては、10代から60代までの幅広い年齢層の51人を対象に、社会統合の特徴を、筆者によるライフヒストリーを構成するインタビューに基づいて分析する。経済的統合に関しては、学業達成と労働市場での地位という2点から、社会文化的統合に関しては、言語、友人関係と配偶者の選択、文化的アイデンティティという3点から検討する。

結果として、インタビュー対象者は、学歴が高く、親の多くが携わる飲食業を継がず、様々な分野のホワイトカラーの職に就き社会的上昇を遂げていた。他方で、オランダ語が第一言語となり、配偶者の選択においては中国系第二世代を選ぶ者が多く、たとえオランダ人と結婚しても、特に親との関係を通して培った思いによって中国人としての文化的アイデンティティを保持していた。中国系第二世代は経済的統合を遂げながら文化的アイデンティティを保持してきたといえ、そこには親への思いが深く関わっていたことが、社会統合の特徴であり、それは戦後から半世紀に亘って変化しなかった。

## 1 はじめに

2005年7月のロンドン同時多発テロや同年11月のパリ郊外暴動に象徴されるように、ヨーロッパ諸国では移民第二世代の社会統合の失敗が深刻な社会問題を生み出し、近年様々な議論を巻き起こしている。

1990年代になって移民第二世代の社会統合に関わる問題が政治化したヨーロッパでは、それに関わる研究が本格的に始まったのはアメリカよりも遅い。ヨーロッパにおける研究の特徴は、国内の移民集団の比較研究が盛んなアメリカと違って、国際比較によって国家間の制度の違いが移民第二世代の社会統合に影響を与えることを明らかにした点である (Crul & Schneider, 2013: 2)。ヨーロッパ諸国の移民第二世代の統合に関する最初の国際比較研究は、1998年から開始されたEFFNATISプロジェクト<sup>\*1</sup>である。また、2003年に開始されたTIESプロジェクト<sup>\*2</sup>は、ヨーロッパ8ヶ国のモロッコ系、トルコ系と旧ユーゴスラビア系第二世代の社会統合に関する国際比較研究で、結論として、複層的な国家間の制度の違いが移民第二世代の社会統合に影響を与えていることを明らかにした (Crul,

Schneider & Lelie (eds.), 2013)。

しかしながら、ヨーロッパにおける移民二世代の社会統合に関する比較研究において、本論が研究対象とする中国系移民<sup>43</sup>はヨーロッパに古くから在住する移民集団の一つであるが、政治問題化することがない目立たない集団であるゆえに研究ファンドがつかず、研究対象となることはほとんどなかった。筆者は、イギリスとフランス、オランダの中国系二世代の20代を中心とする若者へのライフヒストリーを構成するインタビューを実施したが<sup>44</sup>、3国における中国系二世代は、親の社会的地位は低いが、学校教育を通して社会的上昇を果たしていることは共通し、国家間の制度の違いの影響は析出できなかった(山本, 2014)。

本論の目的は、ヨーロッパにおいて中国系人口がイギリスとフランスに次いで多いオランダ<sup>45</sup>の中国系二世代を取り上げて、中国系二世代がいかに社会経済的に上昇し、他方で親の背景にある文化や文化的アイデンティティをいかに保持しているのかを検討し、社会統合の特徴を明らかにすることである。方法としては、60代から10代までの幅広い年齢層を対象に、社会統合の特徴を、筆者によるライフヒストリーを構成するインタビューに基づいて検討する。若者を対象にしてきた従来の移民二世代の社会統合に関わる研究に対して、本論では30代以上を中心にすることによって、個人より長い人生を視野に入れる。さらに現在60代から10代の中国系二世代の社会統合の特徴を検討することを通して、第二次世界大戦後から現在に至るまでの社会統合の特徴の変化を、中国系コミュニティの歴史の変遷を踏まえて明らかにする。

本論の中心的概念である「社会統合」については、経済的、法的、政治的、そして社会文化的統合という4次元があり相互に関連していることは多くの研究で言及されてきた(Algan et al., 2012: 21)。第一の経済的統合には、教育達成や労働市場での地位が、第二の法的統合には市民権、移民としての地位や滞在条件が、第三の政治的統合には政治団体への参加や投票行動などが関連している。そして、第四の社会文化的統合には、友人関係や配偶者の選択、慣習、信条、宗教や言語、及び文化的アイデンティティが関連している(Algan et al., 2012)。中国系に限らずオランダの移民二世代は市民権を保持し第二の法的統合は達成され、移民による政治団体の力は弱く第三の政治的統合を遂げているとはいえない。オランダの中国系二世代は、後章で詳述するアレハンドロ・ポルテス(Alejandro Portes)とミン・シュウ(Min Zhou)の「分節化された同化理論」において、親の人的・経済的資本は少なく、しかし社会的上昇を果たしているという経路に当てはまり、第一の経済的統合を果たしたといえる。経済的統合を遂げながら、第四の社会的文化的統合をどの程度果たしたのかがその社会統合の特徴を形成する。前述のTIESプロジェクトをはじめとする従来の研究は、社会統合を量的調査に基づいて、計量的指標の値を測定し統計的処理によって分析してきた<sup>46</sup>。本論では、当事者の語るライフヒストリーにおいて、特に経済的統合と社会文化的統合に関わる事項がどのように語られているのかを検討することによって、経済的統合を遂げても社会文化的差異を保持できるのかという移民二世代の社会統合に関わる重要な論点を論じたい。

ところで、オランダ社会は、外国人労働者や移民に対する人種的偏見が最も少なく、固有の文化的・民族的アイデンティティを受け入れながら、社会経済的地位の向上に努めてきたことで、一つの模範的事例「ダッチモデル」として評価されてきた(久保田, 1987: 83)。しかし、こうした評価は1990年代までで、成功したといわれた多文化主義モデルは、現在ではほとんど受け入れられていない(Scholten, 2011: 13)。2001年に始まった不況による失業増、移民受け入れ批判によって世論を騒がせた政治家ピム・フォルタイン(Pim Fortuyn)の暗殺、移民による犯罪増加等という政治経済的ファクター

が複合的に作用して、2000年代から移民受け入れをめぐる従前の寛容な開放路線から規制路線への政策転換がなされている(河野, 2008: 85)。このような変化の中で、本論では成功例といわれてきた中国系二世代の社会統合の特徴とその変化を検討することによって、TIESプロジェクトが焦点を当てた社会統合の失敗を問題視されてきたトルコ系二世代との違いを明確にしたい。オランダの中国系移民は、イギリスやフランスよりも人口は少ないが、多文化主義政策を象徴する1979年の「エスニック・マイノリティ」と題する報告書から用いられた「エスニック・マイノリティ」には、社会経済的地位が低くないという理由で含まれなかった(Benton & Pieke, 1998: 157)。ここに示されるように、オランダの中国系移民は成功例として特異な移民集団であり、それを取り上げることによって、社会統合の失敗例だけが論じられてきた従来の議論に対して、成功例との違いを明確に提示できると考える。

論文の構成としては、2章でオランダの中国系移民の歴史的背景を検討する。3章では経済的統合について、学業達成と労働市場での地位という2点から、4章では社会文化的統合について、言語、友人関係と配偶者の選択、そして文化的アイデンティティという3点から検討する。5章では、中国系二世代の社会統合の特徴とその変化について論じる。

調査は、アムステルダム、ユトレヒト、ロッテルダム及びデン・ハーグでの2010年から2014年の短期調査において、中国系二世代51人(60代1人, 50代5人, 40代7人, 30代25人, 20代12人, 10代1人: 表1参照)へのライフヒストリーを構成する1時間半から2時間のインタビューを英語で実施した。複数回にわたってインタビューした者もいる。なお、出身地生まれで、10歳前にオランダに移住した者も二世代とした。

## 2 中国系コミュニティの歴史の変遷

本節では、中国系移民の約100年間に亘る歴史的背景を、中国系コミュニティを大きく変化させた第二次世界大戦と、1980年代初期の中国本土からの移民再流入の本格化と中国料理ブーム終焉を区切りとして3区分して概説し<sup>47</sup>、そこにインタビュー対象者の属性を位置づける。

### (1) 第二次世界大戦前

20世紀初期にオランダに最初に移住した中国人は、第一にオランダ領東インドから来たプラナカン<sup>48</sup>として知られている留学生、第二はオランダの船会社に雇われた船員の広東省宝安出身者と、行商人の浙江省出身者であった。広東省出身者は、経済不況や船燃料の切り替わりによって船員を解雇された後は行商人となった。1930年代の経済不況下では生活は厳しく、ピーナツケーキ(pinda taart)を売り歩く者が増加した。

50代女性(事例38)の父親は、1905年生まれで広東省宝安出身で、船員としてオランダに来て、1930年頃から終戦までピーナツケーキを売った。戦後すぐに中華料理店を開きイギリス人女性と結婚したが、子どもができず離婚し、38歳年下の香港出身の女性と再婚し彼女が生まれた。もう1人の50代女性(事例8)の父親は、戦前に香港新界から船員としてロッテルダムに来て、戦後アムステルダムで中華料理店を開き、同じ香港新界出身の女性と結婚し彼女が生まれた。この2人(事例38, 8)は、3歳から12歳まで香港の祖父母の元で育てられた。

その後、オランダ当局はピーナツケーキ売りを不衛生であるとし、ロッテルダム警察は数百人の中国人を国外追放し、中国系人口は激減した。1920年代にはヨーロッパ最大であったロッテルダムの

表1 インタビュー対象者の属性

| 性別 | 年齢(歳) | 結婚      | 移民年齢     | 最終学歴        | 職業               | 父親出身地     | 母親出身地     | 父親職業                      | 母親職業          | 家庭での言語 | 宗教    |
|----|-------|---------|----------|-------------|------------------|-----------|-----------|---------------------------|---------------|--------|-------|
| 1  | M     | 45      | 離婚 9歳    | 大卒          | IT関連会社起業家        | 香港        | 香港        | 中国料理店従業員(死亡)              | 主婦・死亡         | 広東語    | 無     |
| 2  | M     | 30, 32  | 未婚 オランダ生 | 大卒          | IT関連会社社員         | 中国広東省     | 香港        | 肉加工工場工員                   | 中国系スーパー店員(引退) | 広東語    | 無     |
| 3  | M     | 45      | 既婚 オランダ生 | 大卒          | 中国系アンソーション会長・求職中 | 中国広東省元宝安県 | 中国広東省元宝安県 | 中国料理店経営者(引退)              | 夫の仕事の手伝い(引退)  | 広東語    | キリスト教 |
| 4  | M     | 32, 34  | 未婚 オランダ生 | 大卒          | 求職中, 貿易会社社員      | 香港        | 台湾        | 旅行会社経営者・中国語補習校元校長         | 主婦            | 広東語    | 無     |
| 5  | F     | 35, 37  | 未婚 オランダ生 | 大卒          | 貿易会社社員           | 香港        | 台湾        | 旅行会社経営者・中国語補習校元校長         | 主婦            | 広東語    | 無     |
| 6  | M     | 52, 54  | 未婚 オランダ生 | 大学院卒        | 中学校教師            | 中国広東省元宝安県 | 中国広東省元宝安県 | 中国料理店経営者(死亡)              | 夫の仕事の手伝い(死亡)  | 広東語    | 無     |
| 7  | F     | 25, 27  | 未婚 オランダ生 | 大学院在学中      | 大学院生             | 香港新界      | 香港新界      | 中国料理店経営者引退後, 香港の国際貿易会社経営者 | 主婦            | 広東語    | 無     |
| 8  | F     | 50 ~ 54 | 未婚 オランダ生 | 中等職業訓練学校卒   | 薬剤師助手            | 香港新界      | 香港新界      | 中国料理店経営者(死亡)              | 夫の仕事の手伝い(死亡)  | 広東語    | キリスト教 |
| 9  | F     | 30      | 未婚 オランダ生 | 大学院卒        | 求職中              | オランダ      | 台湾        | 電力会社社員                    | 会社事務員         | オランダ語  | キリスト教 |
| 10 | F     | 52, 54  | 既婚 9歳    | 高等職業教育機関卒   | 中国系旅行会社社員        | 香港新界      | 香港新界      | 中国料理店経営者(引退)              | 夫の仕事の手伝い(引退)  | 広東語    | キリスト教 |
| 11 | F     | 32      | 未婚 オランダ生 | 大卒          | マーケットリサーチ会社起業家   | 中国浙江省青田県  | 中国浙江省青田県  | 中国料理店経営者(10年間はイタリアで)(引退)  | 主婦            | 青田語    | 無     |
| 12 | F     | 37, 39  | 既婚 オランダ生 | 大卒          | 会社員・中国語補習校校長     | 香港        | 香港新界      | 中国料理店従業員(引退)              | 主婦            | 広東語    | 無     |
| 13 | M     | 37      | 既婚 オランダ生 | 大卒          | 電力会社社員           | 香港        | 香港        | 中国料理店経営者(引退)              | 夫の仕事の手伝い      | 広東語    | 無     |
| 14 | F     | 31, 33  | 未婚 オランダ生 | 大学院在学中      | 会計士資格, 教師資格取得中   | 香港新界      | 香港新界      | 中国料理店・コック                 | 主婦            | 広東語    | キリスト教 |
| 15 | F     | 45, 47  | 離婚 6歳    | 高等職業教育機関卒   | 無職               | 香港新界      | 香港新界      | 中国料理店経営者(死亡)              | 夫の仕事の手伝い(引退)  | 広東語    | 無     |
| 16 | M     | 33, 35  | 未婚 オランダ生 | 中等職業訓練学校卒   | コンピューターゲーム会社社員   | 香港新界      | 香港新界      | 中国料理店経営者                  | 夫の仕事の手伝い      | 広東語    | 無     |
| 17 | M     | 27      | 未婚 オランダ生 | 高等職業教育機関在学中 | 学生・日本食店アルバイト     | 香港新界      | 香港新界      | 中国料理店従業員                  | ホテル従業員(引退)    | 広東語    | 無     |

| 性別 | 年齢(歳) | 結婚     | 移民年齢     | 最終学歴          | 職業                 | 父親出身地       | 母親出身地      | 父親職業            | 母親職業         | 家庭での言語 | 宗教    |
|----|-------|--------|----------|---------------|--------------------|-------------|------------|-----------------|--------------|--------|-------|
| 18 | M     | 42     | 既婚 オランダ生 | 大学院卒          | 中学校教師資格取得中         | 香港新界        | 香港新界       | 中国料理店経営者(引退)    | 夫の仕事の手伝い(死亡) | 広東語    | キリスト教 |
| 19 | M     | 33     | 未婚 オランダ生 | 大学院卒          | 携帯電話会社起業家          | 香港新界        | 香港九龍       | 中国料理店・コック(引退)   | 主婦           | 広東語    | 無     |
| 20 | M     | 30     | 未婚 オランダ生 | 大卒            | 旅行会社起業家            | 香港新界        | 香港新界       | 中国料理店・コック(引退)   | 夫の仕事の手伝い(引退) | 広東語    | 無     |
| 21 | M     | 43     | 未婚 7歳    | 大学院卒          | 俳優・歌手              | 香港九龍        | 香港九龍       | ホテル従業員(引退)      | 中国料理店・ウェイトレス | 広東語    | キリスト教 |
| 22 | F     | 52     | 既婚 オランダ生 | 大卒            | 音楽評論家・ジャーナリスト      | インドネシア(中国系) | オランダ       | バイオリニスト         | 会社事務員        | オランダ語  | キリスト教 |
| 23 | M     | 31, 33 | 未婚 オランダ生 | 中等職業訓練学校卒     | 時計会社職工             | 香港          | 香港         | 中国料理店(コック)      | 主婦           | 広東語    | キリスト教 |
| 24 | M     | 38     | 既婚 オランダ生 | 大卒            | 中国料理店経営者           | 香港          | 香港         | 中国料理店経営者(死亡)    | 夫の仕事の手伝い     | 広東語    | 無     |
| 25 | M     | 25     | 未婚 オランダ生 | 中等職業訓練学校準備学校卒 | 大学受験準備中            | 香港          | マレーシア(中国系) | 中国料理店従業員        | 中国料理店従業員     | 広東語    | 無     |
| 26 | F     | 30     | 未婚 オランダ生 | 大卒            | 銀行員                | 香港新界        | 香港新界       | 中国料理店経営者(引退)    | 主婦           | 広東語    | 無     |
| 27 | F     | 21     | 未婚 オランダ生 | 大学在学中(医学部)    | 大学生                | 香港          | 中国系第二世代    | 印刷会社経営者         | 中国系旅行会社社員    | 広東語    | 無     |
| 28 | M     | 38     | 既婚 オランダ生 | 高等職業教育機関卒     | 不動産投資会社・携帯電話会社経営者  | 中国浙江省温州市    | 中国浙江省温州市   | 中国料理店経営者        | 夫の仕事の手伝い     | 温州語    | キリスト教 |
| 29 | F     | 42     | 既婚 オランダ生 | 高等職業教育機関卒     | 主婦                 | 香港新界        | 香港新界       | 中国料理店経営者(死亡)    | 夫の仕事の手伝い(引退) | 広東語    | 無     |
| 30 | F     | 18     | 未婚 オランダ生 | 高等職業教育機関在学中   | 学生                 | 香港新界        | 香港新界       | テークアウェイ・ショップ従業員 | 中国料理レストラン従業員 | 広東語    | キリスト教 |
| 31 | M     | 23     | 未婚 オランダ生 | 中等職業訓練学校準備学校卒 | テークアウェイ・ショップ・アルバイト | 香港新界        | 香港新界       | テークアウェイ・ショップ従業員 | 中国料理レストラン従業員 | 広東語    | キリスト教 |
| 32 | F     | 34     | 未婚 オランダ生 | 大卒            | 国際援助機関職員           | 香港          | 香港         | 中国料理店経営者(引退)    | 夫の仕事の手伝い(引退) | 広東語    | 無     |
| 33 | M     | 28     | 未婚 オランダ生 | 高等職業教育機関卒     | 高級宝飾会社社員           | 香港新界        | 香港新界       | 中国料理店経営者        | 夫の仕事の手伝い     | 広東語    | 無     |
| 34 | M     | 37     | 既婚 オランダ生 | 高等職業教育機関中退    | 求職中                | 香港新界        | 香港         | 中国料理店経営者(死亡)    | 夫の仕事の手伝い     | 広東語    | 無     |
| 35 | F     | 39     | 既婚 オランダ生 | 大卒            | IT関連会社社員           | 中国広東省潮州市    | 香港         | 店経営者(引退)        | 夫の仕事の手伝い(死亡) | オランダ語  | 無     |

|    | 性別 | 年齢(歳)  | 結婚 | 移民年齢     | 最終学歴          | 職業                 | 父親出身地       | 母親出身地       | 父親職業            | 母親職業            | 家庭での言語  | 宗教    |
|----|----|--------|----|----------|---------------|--------------------|-------------|-------------|-----------------|-----------------|---------|-------|
| 36 | F  | 62     | 既婚 | オランダ生    | 中学校中退         | 中国系アンシエーション顧問      | 香港          | オランダ        | 中国料理店経営者(死亡)    | 夫の仕事の手伝い(死亡)    | オランダ語   | キリスト教 |
| 37 | M  | 33, 34 | 未婚 | オランダ生    | 大学院卒          | コンサルタント会社起業        | 中国広東省       | 香港          | 中国料理店経営者(引退)    | 夫の仕事の手伝い(引退)    | 広東語     | 無     |
| 38 | F  | 52     | 既婚 | オランダ生    | 高等職業教育機関卒     | 中国系旅行会社社員          | 中国広東省元宝安县   | 香港          | 中国料理店経営者(死亡)    | 主婦(死亡)          | 広東語     | キリスト教 |
| 39 | F  | 28     | 未婚 | オランダ生    | 大卒            | 携帯ソフト関連会社起業家       | マレーシア(中国系)  | シンガポール(中国系) | 中国料理店従業員(引退)    | 主婦              | 北京語     | 無     |
| 40 | F  | 28     | 未婚 | オランダ生    | 大学院卒          | 中国新聞社社員            | マレーシア(中国系)  | シンガポール(中国系) | 中国料理店従業員(引退)    | 主婦              | 北京語     | 無     |
| 41 | F  | 31     | 未婚 | 8歳       | 高等職業教育機関卒     | 求職中                | 中国浙江省温州市    | 中国浙江省温州市    | 自営業(中国浙江省温州市在住) | 自営業(中国浙江省温州市在住) | 温州語・北京語 | 無     |
| 42 | M  | 42     | 既婚 | イギリス生・1歳 | 中等職業訓練学校準備学校卒 | IT関連会社社員・IT関連会社起業家 | 香港          | 香港          | 中国料理店・コック(引退)   | 中国料理店・ウェイレス(引退) | 広東語     | キリスト教 |
| 43 | F  | 32     | 未婚 | 9歳       | 中等職業訓練学校卒     | IT関連会社社員           | 香港          | 香港          | テークアウェイ・ショップ経営者 | 夫の仕事の手伝い        | 広東語     | 無     |
| 44 | F  | 32     | 既婚 | オランダ生    | 高等職業教育機関卒     | 船舶会社社員             | 香港          | 香港          | 中国料理店経営者(引退)    | 夫の仕事の手伝い        | 広東語     | 無     |
| 45 | F  | 28     | 未婚 | オランダ生    | 大卒            | 弁護士                | インドネシア(中国系) | 中国北京        | 離婚して中国在住        | 中国料理店従業員        | 北京語     | 無     |
| 46 | M  | 26     | 未婚 | オランダ生    | 大卒            | IT関連会社社員           | スリナム(中国系)   | スリナム(中国系)   | 中国料理店経営者        | 夫の仕事の手伝い        | 広東語     | 無     |
| 47 | F  | 26     | 未婚 | オランダ生    | 大卒            | 求職中                | 中国広東省       | 香港          | 中国料理店経営者        | 夫の仕事の手伝い        | 広東語     | 無     |
| 48 | M  | 35     | 未婚 | オランダ生    | 大卒            | IT関連会社社員           | 香港新界        | 香港新界        | 中国料理店経営者        | 夫の仕事の手伝い        | 広東語     | 無     |
| 49 | M  | 32     | 未婚 | オランダ生    | 大卒            | 銀行員                | 香港新界        | 香港新界        | 中国料理店経営者        | 夫の仕事の手伝い        | 広東語     | 無     |
| 50 | M  | 23     | 未婚 | オランダ生    | 高等職業教育機関在学中   | 学生                 | シンガポール(中国系) | 中国浙江省温州市    | 中国料理店経営者        | 夫の仕事の手伝い        | 温州語・北京語 | 無     |
| 51 | F  | 38     | 既婚 | オランダ生    | 高等職業教育機関中退    | 空港職員               | 香港          | 香港新界        | 中国料理店従業員        | 中国料理店従業員        | 広東語     | キリスト教 |

注) 調査が複数回に渡る場合、各調査時の年齢を記載。

中華街は、1940年代に消滅した。戦中はドイツに占領され、生活はさらに過酷になり、1930年代初めには2,000人以上いたが、大戦の勃発時には1,000人以下に減った。

### (2) 戦後から1970年代まで

戦争直後の中国系コミュニティには、広東省と浙江省出身の男性が数百人残っていた。60代女性(事例36)の父親は、浙江省青田出身で1938年にイタリアに渡り、フランスを経てオランダに移住し陶器工場で働いた後、中華料理店を開いた。戦中にオランダ人女性と結婚して彼女が生まれた。彼女によると、1960年代前半までのアムステルダムやロッテルダムの中国系コミュニティは小さく、皆が助け合っていて、レストラン開業には親戚や友人が資金を貸し、できないと面子を失った。

戦後の経済復興の中で、中国料理がブームになり、1947年には全国で23軒しかなかった中華料理店は、小さな村にまで広がり、1970年代後半には約2,000軒に達した。1949年成立の新中国政府は外交関係を絶ち、移民流出を制限する政策を取ったため、故郷浙江省からの移民によって人手不足を補うことは難しく、香港や広東省宝安からの移民によって補い、1960年代に流入のピークを迎えた。50代男性(事例6)の父親は1948年に宝安から、それ以外のほとんどのインタビュー対象者の親は1960年代から1970年代に香港からオランダに移住し飲食業に携わり、競合しないように全国に散住した。香港からの移民流入の結果、香港文化と広東語が中国系コミュニティを支配するようになった。

40代女性(事例15)と30代女性2人(事例34, 51)は、親が仕事で忙しく面倒を見る暇がなく、預けられる親族もいなかったため、オランダ人家庭に預けられて中学生になるまで過ごした。こうした慣行は、1970年代から1980年代にはよくみられた。

香港以外の国や地域からも中国系移民が流入した。1960年代と70年代には、シンガポールやマレーシアの中国系が、また1949年インドネシア独立後に国外に出た約250,000人のオランダ領東インド住民の内の中国系がオランダに再移住した。20代の姉妹(事例39, 40)の父親は中国系マレーシア人で、シンガポール人と結婚後、1980年代にオランダに移住した。プラナカンも1957年には1,400人に増加した。50代女性(事例22)の父親はインドネシア生まれの中国系二世代で、1955年にバイオリンの勉強のためにオランダに留学し、オランダ人女性と結婚し彼女が生まれた。また、オランダ植民地であったスリナムの1975年独立後、1970年代後半には約4,000人の中国系スリナム人が流入した。20代男性(事例46)の両親は、10代後半に香港からスリナムに移住し、約10年後にオランダに移住した。さらに1975年から1982年に6,500人のベトナム難民が流入したが、その4分の1は中国系であった。これら中国本土以外からの流入増加によって、1955年には約2,000人であった中国系人口は、1975年には10,000人を超えた。

### (3) 1980年代以降

1949年から1970年代初期まで一旦停止していた中国本土からの移民は、1970年代中頃から再開し、ヨーロッパへの移住の伝統のある浙江省温州と青田から移民が主に流入した。30代女性(事例11)の父親は、1960年代に青田からイタリアに移住した祖父に合流後、オーストリアを経て1970年代にオランダに来た。

しかしながら、戦後の中国料理ブームは、1980年代以降までは続かなかった。理由として、国内に広がった中華料理店のマーケットが飽和状態になったこと、経済不況で人々が外食を避けるようになったこと、エスニック・レストランの急増、衛生問題スキャンダル等が挙げられる。閉店するレス

トランも現れ、新移民は以前のように就職が難しくなった。他方で、1980年代以降は、浙江省だけではなく、中国東北部や福建省からの新移民も増え、中国系人口は約12万5千人となった(Luk, 2008: 43)。23歳(事例31)と18歳(事例30)の兄妹の両親や30代女性(事例43)の両親のように、1990年代前半に香港から移民した事例もある。近年は日本食ブームとなり、中国系移民経営の日本食レストランが各地に広がっている。

### 3 経済的統合

#### (1) 教育達成

中国系の子どもの学業成績に関する統計資料はほとんどない。インタビュー対象者51人の学歴は、大学院卒7人、大学院在学中2人、大卒20人、大学生1人、高等職業教育機関卒8人、高等職業教育機関在学中3人、高等職業教育機関中退2人、中等教育職業訓練学校卒4人、中等教育職業訓練学校準備学校卒3人、中学校中退1人である<sup>9)</sup>。51人中、大学院・大卒以上が約3分の2を占めており、大学進学率が戦後最高である現在約10%なので、かなり学歴は高く、年齢層による差はない。親の学歴は、4人の両親(事例4, 5, 9, 22)が大卒である以外、小・中学校卒であるので、中学校中退の1人(事例36)以外、第二世代は親の学歴をはるかに超えている。中学校中退の60代女性(事例36)の場合、中学生の時に勉強意欲がない彼女に対して、父親が彼女を退学させて自分の経営する中華料理店で働かせて実践から学ばせたが、例外的である。

進路選択については、中国系第二世代は親の意向に従って理系に進む者が多いと指摘されている(Witte, 2009; Kim, 2009)。しかし、筆者のインタビュー対象者は、ほとんどの者が進路を自分で決定したと述べた。弁護士になった20代女性(事例45)のように、離婚した母親に育てられ安定した職に就くことを望まれたので法学を選択した事例もあった。大学での専攻分野は、工学、経済学、経営学、心理学、物理学、コンピューター・サイエンス、コミュニケーション学、美術や中国語等であり、特定分野への偏りはなかった。

学校時代には親に良い成績を取るよう言われた者が多かった。30代男性(事例13)は、高等職業教育機関準備学校卒業後、自分が何をやりたいかわからなかった時に、母親に「教育が一番大切だからもっと上の学校に通いなさい」と言われ、それを受け入れ、研究大学進学準備学校を経て大学に進んだ。また、もう一人の30代男性(事例16)は、中学校卒業後、コンピューター専門学校に入ったが興味を失い退学した時、母親に別の分野の学校に進みなさいと諭された。多くの者が、親に「自分たちのように飲食業で重労働をしたくないなら学校で勉強しなさい」と言われていた。親は低学歴でオランダの教育制度については知識がなくとも、子どもが学校で学ぶことに価値を置いていたことが第二世代の高学歴の理由の一つであるといえる。

では、第二世代は親の教育への態度をどのように捉えていたのだろうか。30代男性(事例2)は、成績優秀者が通う研究大学進学準備学校を出て大学を卒業しているが、以下のように語った。

両親が教育を非常に大切だと考えていることはわかっていた。両親からプレッシャーを感じなかったのは、自分がそういう性格だったからだと思う。オランダ人で落第する子がいても親はそれ程悲しんでいなくて、中国系の親だったら悲しむだろうなって、親の教育への態度の違いを感じた。自分の親は移民してきて、レストランで12時間も働いていたから、オランダ人の親とは

違って、子どもがこの国でチャンスを掴むために良い教育を受けさせようとするのだと思う。私は親の重労働を見て育って、親のようになりたくなかったし、親を失望させたくなかったから一生懸命に勉強した。(事例2)

20代男性(事例50)は、一番下のレベルの中等教育職業訓練学校準備学校に4年間通った経験があった。不真面目なトルコ系の子どもが多かったが、彼は放課後一緒に遊ばないで、父の店を夜11時頃まで手伝った後で勉強し、上のレベルの高等職業教育機関準備学校に進んだ。より上レベルの教育を求める態度が読み取れる。

#### (2) 労働市場での地位

インタビュー対象者の親の職業の主流は飲食業である。親がレストランを経営している場合、第二世代は例外なく10歳以降は親の仕事を手伝っていたが、そうした経験を通して、親と同じ飲食業に就きたくないという気持ちを強め、ほとんどの者は親の飲食業を継がず、様々な分野のホワイトカラーの職業に就いていた。その中で親の意向に従って親の経営する中華料理店を継いだのは30代男性(事例24)だけである。彼の父親は、1969年に香港から裸一貫でオランダに来て飲食業で成功し中国系コミュニティのリーダーとなった。彼は成績が良く父親に大学進学を勧められ、大学では経営学を学び、卒業後2年間銀行で働いた後、父親の意思に従ってレストランを継いだ。

中国系第二世代は親の世代に比べて社会的上昇を果たしたといえるが、これは前節で指摘した高い学歴によるものであった。学歴が高くない事例としては、40代男性(事例42)が、最下レベルの中等教育職業訓練学校準備学校を卒業後17歳から建設現場での肉体労働を経験したが合わなくて、転職を繰り返し、現在はIT分野で起業し、同じ分野の会社でも働いていた。また、23歳男性(事例31)は、中等教育職業訓練学校準備学校卒業後数年間、複数のテークアウェイ・ショップでアルバイトをしていた。彼は、同じ職業の父親が、息子には他の仕事に就くことを望んでいるのもわかるし、長男として将来的に親の面倒を見なくてはいけないとも思い、今後の進路について、もう一度学校に通うことも視野に入れて悩んでいた。40代男性(事例21)のように、研究大学進学準備学校を出て、大学卒業後大手銀行に就職したが、周りの反対を押しきって数年で銀行員を辞めて、好きなことをするために俳優になった人もいた。

さらに、起業家の多い傾向が指摘できるが、これはオランダの若者全般にいえることである。なぜなら若者の就職難に加えて、オランダでは資金がなくてもネット上に登録するだけで起業できるからである。起業した9人の中で最も成功したのは、30代男性(事例28)で、高等職業教育機関在学中に兄弟4人で携帯電話会社を立ち上げ、数年で国内シェア4位に上り詰めた。親のレストランを手伝っていた時、なぜ重労働をしてもお金が稼げないのかという思いが起業に繋がり、時流に乗って成功した。30代男性(事例19)は、大学院で会計士の資格を取得したが、会計士として働いた経験はなく、中国系第二世代の友人3人と共に携帯電話販売店を起業し、客とのやり取りができて楽しいと言った。

また、ほとんどの者は、中国系であることによって求職時や職場で差別や居心地の悪さを感じたことはないと言ったが、30代男性(事例37)と20代女性(事例45)は別である。30代男性(事例37)は、大学院で博士号取得後大手通信会社に就職した際、上司に仕事はできるが自己主張が足りないと言われ、訓練コースを受講し努力した。しかし、上司にまだ自己主張が足りないと言われた時、それは目上の者を尊重する文化的背景ゆえであることに気づき、中国系としてオランダ社会で昇進する壁を認

識し、妹と2人で起業した。また20代女性(事例45)は弁護士として大手企業で働いているが、職場は白人ばかりで、同僚は意識的に差別をしているわけではないが文化的背景の異なる人への接し方を知らず、自分が中国人であることを意識させられて居心地の悪さを感じていた。このように、大手企業や法曹界等の社会的地位の高い特定の分野では、自らが中国系であることがネガティブに作用すると捉えている者がいた。

## 4 社会文化的統合

### (1) 言語

インタビュー対象者の第一言語はオランダ語であり、親とは母語である中国語方言(ほとんどが広東語)で会話はできても、複雑なことは表現できない。ヨーロッパには全日制華僑学校はなく、オランダでは正規の学校で中国語を外国語として選択できるようになったのは2009年であり、インタビュー対象者は正規の学校で中国語を学ぶ機会がなかった。また、週末に広東語を学ぶ母語教育の場として補習校が開校されたのは、第二世代が増加した1970年代中頃以降で、オランダ中文教育協会(Stichting Chinees Onderwijs) HPによると2014年6月現在全国に40校ある<sup>40</sup>。1990年代以降の中国からの新移民流入の影響で北京語クラスが増加し、広東語クラスは減少の一途を辿り消滅した学校も多い。

インタビュー対象者の半数以上は、中国語補習校に通った経験があり、3年から10年間広東語を学んでいたが、読み書き能力は低い。40代以上の者の学齢期には中国語補習校が開校されていなかった。60代女性(事例36)の場合、父親が広東省出身、母親がオランダ人で、家庭ではオランダ語が話されていたので、中国語の読み書きだけでなく、聞いたり話したりすることもできない。この世代が育った時代は、香港や中国の音楽や番組をテレビやラジオで視聴することもできなかったために、40代以上の者の中国語能力は低い。30代以下の者は、学校時代には親が仕事で忙しく家にいないので、放課後は毎日テレビで広東語のテレビ番組や香港から祖父母が送ってくれたビデオを見ていたことで、広東語を聞く力が身についたと言った。しかし、学校時代に香港のポピュラー・カルチャーに親しんでいても、10代後半になって興味を持ち続ける者と離れていく者に分かれ、日本や韓国を含むアジア全体のポピュラー・カルチャーに興味を持つ者もいる。

そして、兄弟間や中国系第二世代同士の夫婦間でも、主にオランダ語が話されている。第一世代は同じ出身地同士の結婚がほとんどであったが、第二世代はたとえ中国系と結婚しても親の出身地が同じであることは少ない。30代男性(事例13)のように広東語を話す家庭で育ち、妻は温州語を話す家庭で育った場合、オランダ語で会話をしていた。30代女性(事例51)のように親が同じ香港の出身である第二世代と結婚した場合でも、家庭での言語は主にオランダ語であった。第三世代が学齢期になっている現在、家庭ではオランダ語が話され、中国語補習校に通った場合は北京語を学ぶ場合が多い。

### (2) 友人関係と配偶者の選択

友人関係は、3つに分類できる。第一は中国系の友人を持たない者、第二は中国系の友人もそれ以外の友人も持つ者、第三は親しい友人のほとんどが中国系の者である。第一と第二の分類では、特に都会の学校に通った場合、中国系ではない友人には様々な文化的背景の友人も含まれる。そして、友人関係は、個人のライフステージにおいて変化する。

学校時代の友人関係は、地域や学校での中国系の子ども的人数等の環境的な要因が作用する。中国料理店を経営する親は、都会に定住する場合もあるが、数年ごとに店を売却しより大きな店に買い替えるので、全国の小さな街を転々と引っ越す場合が多い。小さな街の小・中学校は白人がほとんどなので、中国系の友人とは親の知り合いや中国語補習校を通して知り合う場合もあるが多くはない。

10代後半になると行動範囲が広がり、友人の紹介や大学での中国系第二世代学生のアソシエーションを通して、中国系の友人が増えている。中国系の友人と出会って、幼少期に親が忙しく寂しい思いをしたとか、親の店の手伝うという経験を分かち合うことできる居心地の良さを感じる者が多く、中国系第二世代が情報交換するウェブサイトや、中国系の若者が集うアジアン・パーティーに人気が集まっている。

しかし、10代後半で中国系の友人といることに居心地の良さを感じる者だけではなく、あるいは一旦はそうであったとしても違和感を抱くようになる者もいる。居心地の良さを感じる者は友人関係が中国系に限定されていき、違和感を抱く者は中国系の友人と疎遠になっていく。20代男性(事例4)は、10代後半でそれまで少なかった中国系第二世代の友人と友人の紹介を通じて付き合うようになったが、「中国人同士はゴシップが多く複雑でいやになった」と言った。

40代以上の者が10代の頃は、中国系の人と出会う場は中国系教会であった。アムステルダムで育った2人の50代女性(事例8, 38)は10代後半から中国系教会に通い、中国系の友人を得、その内の1人(事例38)はそこで出会った中国系第二世代と結婚していた。

30歳前後に自らの中国人性を再解釈していた40代男性(事例21)と50代女性(事例22)の場合は、30歳頃から自らの中国人性を模索していく過程で、それまでほとんどなかった中国系の人との付き合いが増えていた。また、30代男性(事例37)は、就職するまで中国系の友人はいなかったが、職場で中国人であることで評価されないと認識し中国人として自らを意識するようになった後で中国語放送局を立ち上げ、その後中国系第二世代や中国出身者との付き合いが増えた。年を取るにつれて、中国系の人との関わりの方が多くなっていく場合が多い。

配偶者の選択に関しては、10代後半で中国系の友人といることに居心地の良さを感じた者は中国系の友人が多くなり、配偶者も中国系になる可能性が高い。逆に中国系の友人に違和感を抱く場合は、中国系以外の人を配偶者として選ぶ可能性が高まる。しかし、50代女性(事例10)は、オランダ人の友人しかいなかったが、たまたま出会った香港から仕事でオランダに来た男性と結婚している。30代女性(事例14)は中国系の友人といるよりもオランダ人の友人といる方が居心地がいいと言うが、配偶者は親と会話ができる中国系の人を望んでいた。

インタビュー対象者の内、既婚者は16人で、10人が中国系第二世代と結婚していた。それ以外の6人は、50代女性1人(事例10)が香港出身者と、もう1人の50代女性(事例22)がドイツ人と、40代女性(事例29)と30代女性2人(事例34, 35)はオランダ人と、30代女性(事例44)は中国出身のインドネシア系第三世代と結婚していた。40代男性(事例1)は日本人と、40代女性(事例15)はオランダ人と離婚をしていた。独身の50代男性(事例6)と40代男性(事例21)は、オランダ人の恋人を持った経験があったが、一緒にいると違和感を抱き自らの中国人性を感じたといい、関係は破たんしていた。男性には中国系以外の人との結婚を継続させている事例はなかった。

### (3) 文化的アイデンティティ

ここでは、文化的アイデンティティを、過去の語りの中に自己を位置づける仕方に与えられた名づ

けであり (Hall, 1989: 70), 歴史や文化の言説における「アイデンティフィケーション (identification)」の地点であり, 本質ではなく, 「位置取り (positioning)」として捉える (Hall, 1989: 71)。インタビュー対象者の多くは, 自らを「オランダ人か中国人のどちらかではなく, 中間にいる」と捉え, その文化的アイデンティティは, 「オランダ人である」, 「オランダ人でもあり中国人でもある」, 「中国人である」という3つの位置取りを結ぶ線上にプリズムのように位置づけることができる。30代女性 (事例44) のように「アジア人」として自己を位置づけた者もいた。そして, その位置取りは固定的なものではなく, 多くの者が, 10代中頃までオランダ人と同じと思ってきたが, 10代後半で中国系の友人が増え, それを居心地が良いと感じるにしろ違和感を抱くにしろ, そうした時期を経て自らを「両方である」と捉えていた。オランダ人としての意識の方が強い場合 (事例1, 2) と中国人としての意識の方が強い場合 (事例36~51) があり, 後者の方が多い。

前述したように50代以上の者の中国語能力は低い, それによって50代以上の者が自己を中国人として位置づけていないわけではない。60代女性 (事例36) は, 労働から学ばせる父親の考え方を, 40代男性 (事例42) は「自分のことは自分でしなさい」という父親の教えを自己の内にある中国人性と捉えていた。また, 中国人としての意識の方が強い者 (事例37~51) は, 友人関係が中国系の人に限られ, パートナーは中国系である場合が多い。初婚相手は中国系第二世代で, 再婚相手がオランダ人である30代女性 (事例12) は, 結婚相手は文化的アイデンティティには影響がないと述べた。前述した30代男性 (事例37) のように, 職場で上司に自己主張が弱いことを指摘されて, オランダ人とは異なることを認識し, オランダ人から中国人へ位置取りを転換させた事例もあった。

中国系の友人との付き合いがそれ程なく, オランダ人と結婚した40代女性 (事例29) は, 背中に「孝」という刺青を入れて, 毎日老人ホームの母親を訪問していた。彼女は自分自身をとて西歐化されていると思うが, こうした母親への気持ちが自己の内にある中国人性であると語った。30代女性 (事例35) は, 10代後半から父親に反抗しオランダ人の友人の方が多く, オランダ人と結婚し2人の子どものいるが, 子育ての仕方はオランダ人のように親と友人のように接して子どもに何でも自由にさせるのではなく, 親がある程度権威を示す中国式であると述べた。50代女性 (事例38) は, 30代で3人の子育てをする時に, 子どもをオランダ式で育てるのか中国式で育てるのかを考えることによって, 初めて文化的アイデンティティを意識し, 中国人として自らを位置づけ, 中国式で子どもを育てたと語った。

中国系第二世代は20代になっても男女問わず親と同居する人が多いが, 40代男性 (事例18) は85歳の父親と同居し, 独居老人の世話をするボランティアにも関わっていた。

子どもとの同居を望む中国人と, 1人で老人ホームで暮らすオランダ人とは, 考え方に大きな違いがある。親は自分たち子どものために重労働をしてくれたのだから, 年を取ったら子どもと暮らした方がいいと思う。自分はこの点はとても中国的だと思う。(事例18)

以上のようにインタビュー対象者は, 親, 友人, パートナーや職場の人との日常的関係において, オランダ文化と中国文化の差異を感じることを通して共同性を創造/想像し, そこに自らを位置づけている。そして, 中国人としての位置取りは, 心に残る親の教え, 老後の親への情愛や接し方, 子育ての仕方という親子関係をめぐる語りとの結びつきが深かった。また, 親との葛藤を経験しなかった者もいたが, 10代中頃から親に外出を禁止されたこと等によって親との葛藤を経験した者もいた。特

に女性 (事例5, 29, 35) はそうした葛藤を経験していたが, これらは思春期特有のもので, 20代になると小さくなっていった。思春期に自分が中国人かオランダ人かわからなくなって悩む時期があったとしても, ほとんどの者は20代でそれを乗り越えていた。

40代まで自己アイデンティティの確立に悩みを抱えていたのは, 母親と良い関係が築けなかった2人の女性である。50代女性 (事例8) の場合, 母親が精神を病み, 4人兄弟の中で彼女1人が10代中頃から母親と住んで面倒をみたが, 母親が自分のことを気にかけてくれたことはなく, 彼女は他人と心を通わすことができなくなり, 10代後半でクリスチャンになった後も悩み続けた。自己アイデンティティの確立に悶々としていた時期は, オランダ人でもなく中国人でもない自分に悩んでいた。30年にも亘って苦しんだ後, 40代後半になってクリスチャンとしての自己を見出し, そうした過程で文化的アイデンティティは彼女にとってそれ程重要なものではなくなっていた。30代女性 (事例34) の場合, 中学生まではオランダの人の家庭に預けられて育ったが, 母親がとても支配的な人で良い関係を30代後半になった現在に至っても築けず, 長年住んだ街からアムステルダムに引っ越し, もう一度学校に通うことも含めて人生を見つめ直していた。

## 5 ライフヒストリーにみる社会統合の特徴

ヨーロッパの移民第二世代の社会統合に関する議論よりも先んじていたアメリカでは, 移民集団が多数派の社会的・文化的実践に加わり始めると, 民族的・文化的・社会的区別は消えていくという古典的同化理論は, 1965年改正移民法以降の経済的変化の中で多様化した新移民の複雑な現実には適合しないとして, 根強い同化否定論がみられた。その中で生まれた, アレハンドロ・ポルテス (Alejandro Portes) とミン・シュウ (Min Zhou) の「分節化された同化理論」では, 移民第二世代のアメリカ社会への統合の3つの経路が指摘された (Portes & Zhou, 1993)。第一は, 親が十分な人的・経済的資本をもち, 家庭が安定し, 肯定的編入様式<sup>\*11</sup>で移住すれば, 社会的上昇移動を果たす。第二は, 親の人的・経済的資本が不足していても, エスニック・コミュニティの価値と連帯の保持によって補えれば, 社会的上昇を果たす。第三は, 親の人的・経済的資本が不足し, 否定的編入様式で移住し, エスニック・コミュニティの連帯も弱い場合, 社会的上昇ができず, 都市下層に同化する。

分節化された同化理論に対して新同化論者<sup>\*12</sup>は, いくつかの留保条件つきではあるが, 同化という概念は基本的に有効であり, アメリカ社会で成功を果たすための第二世代の実践的戦略や行為は, エスニックな区別や文化的・社会的区別が消失するという同化へと繋がることを主張した (Alba & Nee 2003: 271-292)。オランダの中国系第二世代は, 親の人的・経済的資本は少なく, しかし社会的上昇を果たしている点で, 「分節化された同化理論」の第二の経路に当てはまるといえるが, モーリス・クルール (Maurice Crul) とジェン・シュナイダー (Jens Schneider) は, この第二の経路は, 若者が大人になりミドルクラスに入れば, 結局「古典的同化」とみなすことができるのであり, 人生をより長いスパンで捉えれば, 新同化理論と分節化された同化理論との違いはそれ程大きくないと指摘している (Crul & Schneider, 2013: 2)。

しかしながら, 筆者のインタビュー対象者は, 社会的上昇を遂げ若者が大人になり, たとえオランダ人と結婚をしても, 親との関係を通して培った思いによって, 親の教えや子育ての仕方, 老後の親への接し方に自らの中国人性を見出し, 経済的統合は逃げて中国人性としての文化的アイデンティティを保持し社会文化的統合はしていなかった。つまり経済的統合を求めれば社会文化的に統合され

るという「古典的同化」へは繋がっていなかった。さらに、子どもの将来のために重労働をする親を悲しませたくないという思いが二世世代の高い学歴や社会的上昇に繋がっていたように、経済的統合にも親への思いが関わっていた。これが中国系二世世代の社会統合の特徴といえる。

オランダの中国系コミュニティは2011年に移住後100周年記念を祝った。50代以上の者の学齢期には、中国語補習校も開校されていなくメディアを通して中国語を耳にする機会もなかったので中国語能力は低い。他方で1960年代前半のアムステルダムやロッテルダムでは中国人同士が知り合いで助け合うような人間関係があったが、60年代後半から、中国系移民は全国に散らばって住むようになり、以前のような密接な人間関係は薄れ<sup>\*13</sup>、大都市のチャイナタウンは商業地区となった。そして、社会全体が時代の流れと共に変化中、若い世代は幼少期に香港に送られ祖父母に育てられたり、オランダ家庭に預けられたりすることはなくなった。しかし、若い世代には友人が中国系に限られる人も多く、アジア・パーティーや中国系が情報交換するウェブサイトも人気があり、年配者よりも中国人としての文化的アイデンティティを保持していないとはいえない。経済的統合に関しても時代の変化を反映して起業家が多くなったが、年齢層による明らかな差異はなかった。中国系二世世代は、この半世紀に亘って、経済的統合を遂げながら文化的アイデンティティを保持してきたといえ、そこには親をめぐる思いが大きく関わっていた。こうした二世世代の半世紀間変化をしていない社会統合の特徴が中国系コミュニティの特徴の一つを形成し、問題のない集団として捉えられてきた。

TIESプロジェクトの結果によると、ヨーロッパ8ヶ国のトルコ系二世世代は、約8割がトルコ人としての意識を保持し、それはイスラムとしての意識との結びつきが深かった。経済的統合に関しては、ここ20年間で社会的上昇を果たした一部の層が生まれているとはいえるものの、ほとんどの者が依然、低い社会経済的地位に留まっている(Crul & Schneider, 2013)。こうしたトルコ系二世世代の社会統合と、半世紀前から文化的アイデンティティを保持して社会的上昇を果たしてきた中国系二世世代との違いは明らかである。さらに、TIESプロジェクトの結果は、国家間の制度の違いがトルコ系二世世代の社会統合に影響を与えていることを明らかにした(Crul, Schneider & Lelie (eds.), 2013)が、筆者が以前調査をしたオランダ、イギリス、そしてフランスの中国系二世世代の若者には、その影響はなかった。まだイギリスとフランスにおける30代以上の中国系二世世代に関する調査が十分ではないので仮説の域を出ないが、親への思いとの関わりが深いという中国系二世世代の社会統合にみる特徴が、ナショナル・コンテキストが社会統合のあり方にそれ程影響を与えない理由の一つではないかと考える。

※本論は、科研費基盤研究(B海外学術調査)研究課題「EUにおける移民第2世代の学校適応・不適応に関する教育人類学的研究」(研究代表者:山本須美子、平成24年度~27年度)の研究成果である。

\*1 EFFNATISプロジェクトとは、「Effectiveness of National Integration Strategies towards Second Generation Migrant Youth in Comparative European Perspective」の略。ヨーロッパ8ヶ国の移民二世世代の若者を対象とした、国家統合政策と戦略の有効性に関する国際比較研究である。

\*2 TIESプロジェクトとは、「The Integration of the European Second Generation」の略。

\*3 本書では、「華僑」及び当該居留国の国籍を取得した者としての「華人」を指す語として、「中国系移民」を用いる。

\*4 イギリスの対象者は37人、フランスは24人、オランダは27人である。

- \*5 フランスの中国系人口は約60万人に達し(Beraha, 2012: 11)、イギリスの2011年国勢調査では約43万3千人(Office for National Statistics, 2011)、オランダは約12万5千人である(Luk, 2008: 43)。
- \*6 トルコ系を対象とする質的調査は現在モーリス・クルール(Maurice Crul)等により進行中であり、まだ結果は公表されていない。トルコ系と中国系の質的調査に基づいた比較研究に関しては、現在クルール等と共同で研究費を申請中である。
- \*7 歴史的背景に関する記述は、Li(1999: 27-52)とBenton & Pieke(1998: 125-167)に依拠している。
- \*8 プラナカンは17世紀以降中国からオランダ領東インドに渡った人々の子孫で、長期にわたり現地社会と文化的に混交した人々を示す。
- \*9 オランダの学校制度は、4歳から小学校に入学し、12歳で「シト・テスト(Cito Toets)」という全国統一テストを受ける。その結果によって、研究大学進学準備学校(VWO)、高等職業教育機関準備学校(HAVO)、中等職業訓練学校準備学校(VWBO)の3コースに分かれる。コース間の移動は可能である。上のレベルの研究大学進学準備学校は6年制で大学教育(WO)に、次レベルの高等職業教育機関準備学校は5年制で高等職業教育機関(HBO)に、最も下のレベルの中等職業訓練学校準備学校は4年制で中等職業訓練学校(MBO)に進む。
- \*10 Stichting Chinees Onderwijs HP (<http://www.chineesonderwijs.nl/index.php?id=8>, June 1, 2014)
- \*11 ここでいう編入様式とは移住先の移民に関する政治や受入社会の価値観や偏見、エスニック・コミュニティの種類が組み合わさったものである。
- \*12 例えば、メアリー・ウォーターズ(Mary Waters)、ダグラス・マッシー(Douglas Massey)、リチャード・アルバ(Richard Alba)、ヴィクター・ニー(Victor Nee)等を挙げることができる。
- \*13 現在でも二世世代の結婚式は、オランダ人との結婚でも、親の付き合いも含めて約300人を招待するケースが多いので、中国系同士の人間関係が消滅しているわけではない。

#### 【参考文献】

- ・河野健一、2008「イスラム系移民増に揺れるオランダ——伝統のリベラリズムと多文化主義は守れるか」長崎県立大学国際情報学部編『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』9号、長崎県立大学、79~90頁
- ・久保田治郎、1987「オランダにおける外国人移民(マイノリティ)対策の動向——オランダに学ぶ「国際化の影の側面」への対応」自治研究編集部編『自治研究』63(10)号、第一法規出版、81~100頁
- ・山本須美子、2014「EUにおける中国系移民の教育エスノグラフィ」東信堂、364頁
- ・Alba, Richard & Victor Nee, 2003, *Remaking the American Mainstream: Assimilation and Contemporary Immigration*, Harvard University Press, p.384.
- ・Algan, Yann, Alberto Bisin, Alan Manning, & Thierry Verdier, 2012, *Cultural Integration of Immigrants in Europe*, Oxford University Press, p.368.
- ・Benton, Gregor & Frank N. Peike, 1998, 'The Chinese in the Netherlands', In Benton, Gregor and Frank. N. Peike (eds.), *The Chinese in Europe*, London: Macmillan Press, pp.125-167.
- ・Beraha, Richard, 2012, *La Chine à Paris: Enquête au Cœur d'un Monde Méconnu*, Paris: Robert Laffont, p.308.
- ・Crul, Maurice & Jens Schneider, 2013, 'Second-generation Migrants: Europe and the United States', In Ness, Immanuel (ed.), *The Encyclopedia of Global Human Migration*, Blackwell Publishing Ltd. pp.1-5.
- ・Crul, Maurice, Jens Schneider & Frans Lelie (eds.), 2013, *The European Second Generation Compared: Does the Integration Context Matter?* Amsterdam: Amsterdam University Press, p.416.
- ・Hall, Stuart, 1989, 'Cultural Identity and Cinematic Representation', *Framework* 36, pp.68-81.
- ・Kim, Kuo, 2009, *Migrants from the Wenzhou Region in the Netherlands: A Generational Perspective*, MA Thesis, International School for Humanities and Social Sciences, University of Amsterdam.
- ・Li, Minghuan, 1999, *We Need Two Worlds: Chinese Immigrant Associations in a Western Society*, Amsterdam: Amsterdam University Press, p.360.
- ・Luk, Wai-ki E., 2008, *Chinatown in Britain: Diffusions and Concentrations of the British New Wave Chinese Immigration*, New York: Cambria Press, p.396.
- ・Office for National Statistics, March 2011, *Census 2011, Ethnic group, Local Authorities in the United Kingdom*, London: HMSO, p.10.



*Kingdom* (Table KS201UK).

- Portes, Alejandro & Min Zhou, 1993, 'The New Second Generation: Segmented Assimilation and Its Variants', *The Annals of the American Academy of Political and Social Science* 530, pp.74-96.
- Scholten, Peter, 2011, *Framing Immigrant Integration: Dutch Research-Policy Dialogues in Comparative Perspective*, Amsterdam University Press, p.314.
- Witte, Lilly, 2009, *I Feel Like a Banana, Yellow from the Outside, White from the Inside: Ethnic Identification of Second Generation Dutch Chinese People*, MA Thesis, Faculty of Social Sciences, Vrije University, Amsterdam.

## The Social Integration of Second Generation Chinese in the Netherlands: The Analysis of Life Histories

YAMAMOTO Sumiko

*Toyo University*

**Key Words: second generation Chinese, social integration, life histories**

The purpose of this study is to clarify how second generation Chinese in the Netherlands have integrated into Dutch society. While previous studies of the social integration of second generation Chinese focused on young people, I interviewed 51 second generation Chinese ranging in age from 10 into their 60s, and constructed their life histories. This study also examined how the social integration of second generation Chinese has changed over the past half century, in the context of historical changes in the Chinese community. With regard to economic integration, I focused on my interviewees' educational achievements and relative success in the labor market. With regard to sociocultural integration, I focused on their language abilities, choice of friends and partners, and cultural identities.

In conclusion, I point out that my interviewees have been very successful in school, and are now engaged in white-collar work, having left the catering trades their parents were involved in. On the other hand, their Chinese language abilities are poor, and their first language is Dutch. Nonetheless, many have married other second generation Chinese, and maintained their Chinese cultural identities—especially through affectionate relationships with their parents. Second generation Chinese have retained their cultural identity over the past half-century, while achieving social mobility. The affection they feel for their parents has played an important role in this outcome, and can be described as a characteristic of second generation Chinese' social integration.